

《水滸傳》の入回詩について

*はじめに

《水滸傳》は、明清の交に成立した數多の長篇白話小説と同じく、章回形式となっている。一回ごとに話を分割し、山場を點綴しながら回をつなぎ合わせる章回形式では、全體として一篇の長篇小説でありながら、主體をなす本文と次元差をもつ、いわば開始部と終結部が毎回必ず存在する。

各回の本文が始まる前に置かれた入回詩は、冒頭に冠せられた對句形式の回目同様、一見しただけでその回の讀み取りに必要な情報が得られるようにするためのものである。讀者の側から言えば、あらかじめそれによって豫測をたて、期待を増加させるのであり、作者の側から言えば、それをどのよう表現するかという點で、讀者をひきつけるための技術を一定程度要請されることが十分考えられる。

《水滸傳》の入回詩について（北村）

北 村 眞 由 美

そこで、本稿では「容與堂本」^①を用い、意識的に緊張と弛緩が繰り返される回末と回首の接合部分の連續性を考察することで、一見すると毎回均一に思われる《水滸傳》の話の盛り上がりや組み立てを検討し、入回詩の役割り及び回目や回末表現との關わりについて考察してみたい。

*「容與堂本」の特徴

百卷百回の「容與堂本」は、非常に整った章回形式をもつ。挟み込まれた詩詞は他の版本に比べて最も豊富であり、毎回回首には必ず「詩曰」「詞曰」などとして入回詩が置かれ、^②回末には次回の豫告・暗示などがあるのが大きな特徴である。基本的には「有分教」に續く四言や六言の句の積み重ねによって強調され、「畢竟」で讀者の興味をそそる謎掛けの言葉添

え、語り手による回末の常套句「且聽下回分解」へとつながる。回によって異なることもあるが、概ねその形式を踏襲し、最後まで整った體裁を備えている。回末の緊張感、次の回の回首に置かれた詩詞によって弛緩し、新たな氣分で讀者はその回の中心的敘述に移行する。多くの話柄を撚り合せて長大に膨れ上がっていく過程において、各回の體裁は、「容與堂本」では幾何學的なまでに均整がとれている。

こうした回末と次の回首との間に配置されているのが入回詩であり、詩詞による表現は小説のほぼ一回分に相當する内容を集約する。例えば戯曲にもある73回の「李逵負荊」、また74回の燕青の相撲のような單發の挿話を下敷きにした場合、その回の中で展開する内容を入回詩に詠み込んで紹介すれば、回の話と密接に結びついて導入を果たすことになり、一回ごとの獨立性も高まる。

「容與堂本」の入回詩のほとんどは、各回の内容をふまえた紹介であり、やがて語られる話の流れの要約を内容とする一種の暗示・豫告ともなる。換言すれば、基本的に七言の對句からなる回目が示す通り、その回で展開される物語の世界を壓縮し、主な出來事を讀み手が瞬時に把握できるように示しているものといえよう。各回には大きな二つの山場が配置さ

れ、規則正しく緊張と弛緩のリズムを内包している。

つまり「容與堂本」を手にする讀者の側からすると、本文で展開する事柄から抽出した要素が、まず回首の挿繪で視覺的に示され、次に回目で根幹が提示され、入回詩で盛り上がり頂點が象徴的に現わされる三段構えの豫告を毎回例外なく経てから本文の敘述が開始される。

* 「容與堂本」の入回詩

次に、入回詩に詠まれている内容と、本文の内容との關わりから入回詩のはたらきについて分類すると、(1)新しい回の話の豫告するもの、(2)前回までの話をまとめめるもの、(3)前回の回末の謎掛けの種明かしをするもの、(4)《水浒传》全體のストーリーをふまえて主題を盛り込んだものなどがあり、それら4つの要素をひとつも満たしていないものは、本文に多少關係する内容であっても漠然としすぎているため、(5)脱線の入回詩とする。さらにその分類の基準となる條件について考察し、それぞれの題材の傾向を整理すると次のようになる(表)。

(1) その回に展開する内容の豫告

多くは、回目で示された内容と一致して回の山場を詠んだ

豫告となっており、導入部としての役割りを果たしている。題材としては、歴史上の故事に事寄せて物語内容を述べるものや、端的に《水滸傳》中の人物や事件を評するものなどがある。例えば57回の入回詩では《三國演義》をはっきり意識した内容の詩が掲げられている。こゝは、官軍側の呼延灼を梁山泊が仲間に取り込もうとする回であるが、「七擒孟獲奇諸葛」「兩困雲長義呂蒙」として、孟獲と諸葛亮、關羽と呂蒙の歴史的事件を引き合いに出しながら、具體的な攻略法に對する讀者の興味をかきたて、やがて呼延灼が何度か背きながらも最終的には盜賊側に寝返る展開を豫感させる内容となっている。また、回の出來事を具體的に示す以外に、例えば、61・64・74回では、その回で活躍する豪傑を一人だけにしぼって、長所を歌い上げている。韻文を引用した直後の本文でも語り手の言葉を挿入して、人物の特徴に焦點を合わせ、それらの英雄に對する贊辭を再度繰り返して強調している。

(2) 前の内容のまとめ

新しい回に入る以前の回で述べられた事柄を、さらに歌い上げる。例えば82回の燕青を讀える詩では、招安をとりつけるために皇帝とまみえる燕青のはたらきなど、すでに81回で展開した内容を再び詩に詠んで山場を盛り上げる。他に2・5

《水滸傳》の入回詩について（北村）

・18・20・37・51・80・82・83・85・89・100回も同様である。

(3) 回末の謎掛けの種明かし

前回の回末で提示された謎掛けが、本文の敘述によって解決される前に、回首の詩詞で種明かしをする。4・9・12・17・23回などに現われている。

(4) 《水滸傳》の主題の提示

新しく展開する回の内容に關わらず、《水滸傳》そのものの枠組みを補強し、大きなテーマを詠み込み、遠い先のストーリーを先取りする。梁山泊に集う好漢を詠んだものでは、「水滸」「梁山」などの語とともに、團結する英雄の姿と義の尊さを示している。《水滸傳》の物語は、封じ込められていた妖魔が逃げ出したことが發端になっており、梁山泊の豪傑がそのときの妖魔の變化したもの、また星の生まれ變わりであるとする筋立ては、天書に記された内容をはじめ、隨所に見え隠れする。これは、ときとして物語中の出來事が起こるべくして起こった必然性の根據として使われ、英雄のたどる運命は既定の事實であるものとして讀者を納得させるはたらきをもっている。

(5) 脱線

本文と關連するが、具體的な人名・地名などの盛り込まれ

ていない入回詩は、やや焦點が定まりきらない。例ば、27・31・34回などでは因果應報を唱え、處世訓や格言めいたものとして雰囲気作りに役立つものの、物語内容と積極的には關わり、直前の回末の謎掛けとの呼應もないだけに、話の盛り上がり、弱いの弱い回では、漠然とした詩詞を挿入して入回詩とすることの弊害を示しているともいえるよう。

このように、入回詩の題材は豊富である。それゆえこの分類にしたがって、入回詩が挿入された回の内容と、『水滸傳』の構成とを合わせて考えてみると、入回詩が小説の中で果たす様々なはたらきをみることができよう。

* 回を越えた呼應——「智取生辰綱」

詩曰：勇悍劉唐命運乖，靈官殿裏夜徘徊。偶逢巡邏遭羈縛，遂使英雄困草萊。鹵莽雷橫應隨計，仁慈晁蓋獨憐才。生辰綱貢諸珍貝，總被斯人送將來。（14）

詩曰：英雄聚會本無期，水滸山涯任指揮。欲向生辰邀衆寶，特扳三阮協神機。一時豪俠欺黃屋，七宿光芒動紫微。衆守梁山同聚義，幾多金帛盡俘歸。（15）

鷓鴣天：罡星起義在山東，殺曜縱橫水滸中。可是七星成聚

會，却於四海顯英雄。人似虎，馬如龍。黃泥岡上巧施功。滿歎金貝歸山寨，懊恨中書老相公。（16）

ここでは、入回詩の中での豫告の例をさらに検討してみた。まず14回から16回までの入回詩は、いずれも「智取生辰綱」を扱っている。これは、『水滸傳』の雛型ともいえる『宣和遺事』の段階からすでに採録されている話で、やがて梁山泊に集結する豪傑たちが、初めて徒黨を組んで挑む金銀財寶の強奪作戦である。誕生祝いの財寶強奪の計畫をもちかけられた晁蓋は、夢に出てきた北斗七星の數にあわせて相棒の人數を決める。13回の回末にきっかけができてから、16回で計畫を實行するまでの14・15回は、人數を揃えるための準備に費やされる。それまでは個別の英雄譚を展開し、いわば線條的な敘述であるが、14回になって集團強盜へと變貌しつつある豪傑たちの物語の端緒が開かれる。そのため14から16回の回首では、計畫に加擔すべき人物名を豫め読み込み、合計七人の豪傑が集まることを暗示している。

14回では、はじめから「劉唐」「雷橫」「晁蓋」といった人物名を出し、彼らの出會いがその回の主な出來事であることを示しつつ、それがやがて起こる「生辰綱」強奪事件へとつ

ななることをほのめかしている。

15回では、阮三兄弟の仲間入りをうたい、「七宿」を提示し、16回でも同様に、「七星」である彼らが事件を引き起こす伏線の確認をしている。いずれも、各回の内容を概括して全體の中での位置付けをしながら、16回の山場にむかって緊張感を高めている。回を重ねるたびにモチーフが繰り返される仕組みで、形の上では三回分にまたがる話でも、最終的には「智取生辰綱」の一つの大きな流れにまとまるよう意識的に提示したものと思われる。

「智取生辰綱」は、12・13回と17回の主要人物である楊志にまつわる話に狭まれた形で展開する。財寶を守る側と奪う側という立場の違いこそあれ、楊志とその他の好漢とを結果的には結びつけるきっかけとなる事件であるが、16回の冒頭で盜賊側の手筈が完全に整つてから、語り手の「話不繁繁。却説……」の言葉で大きく場面轉換がなされ、楊志の話に移る。讀者には、早い段階から読み解きの手がかりが與えられているので、語り手の「我且問你、這七人端的是誰？」という種明かしの言葉を楽しむことができる。

このように、各回の話の山場が實際には均一な盛り上がりを見せず、數回分にも及ぶプロットを扱っている場合は、大

《水滸傳》の入回詩について（北村）

局をとらえた詩詞が毎回回首に掲げられれば、先の展開について話のまとまりを把握することができる。全體の大きなテーマを象徴的に歌い上げるほどのイメージ増幅力を備えている詩詞は、回ごとに進行中のストーリーの流れも視野に入れ、讀者にとって一見すると脈絡がないように思われる出來事をつなぎ合わせる合圖の役目を擔っている。

* 引用による導入

念奴嬌：大江東去，浪淘盡，千古風流人物。故壘西邊，人道是三國周瑜赤壁。亂石巉崖，驚濤拍岸，捲起千堆雪，江山如畫，昔時多少豪傑。遙想公瑾當年，小喬初嫁後，雄姿英發。羽扇綸巾，談笑間，檣櫓灰飛煙滅。故國神遊，多情應笑我，早生華髮。人生如夢，一樽還酹江月。（41）

長篇らしい壯大な構成を讀者に意識させ、回の内容に應じて雰囲気を変えるのに成功している入回詩の例としては、41回の回首の詞（念奴嬌）が挙げられる。これが蘇東坡の（赤壁懷古）の引用であることは、詞の挿入の直後から始まる「話說這篇詞乃念奴嬌，是這故宋時東坡先生題詠赤壁懷古。」という語り手の言葉で明示される。この回では、回首の詞の解説

から出發し、そこに描かれる内容の勢いに乗じて、好漢の勇壯な動きの説明に活かされる。

詞には曹操・周瑜・孔明など《三國演義》の登場人物名が盛り込まれ、《水滸傳》における大規模な集團戰鬥場面の描寫を繰り廣げる呼び水としての役割を擔っている。ここは、處刑されかかった宋江と戴宗を奪回すべく、梁山泊の豪傑たちと手下あわせて百五十人が一丸となり、本格的抵抗を示して江州の町全體を巻き込む騒動に發展する重要な山場といえる。

確かに、戰鬥場面の規模だけで考えれば、《三國演義》の赤壁の戦いに比べてはるかに小さな戦いではあるが、「爲何自家引這一段故事將大比小？」という語り手の言葉にもあるとおり、「大」である《三國演義》の壯絶な歴史的戦いの雰囲気を作り、「小」である宋江奪回の戰鬥場面の盛り上がりを助けるはたらきをしているといえよう。「有分教：潯陽岸上、果然血染波紅；湘浦江邊、眞乃屍如山積。」と強調し、41回の回首では、それに呼應するように類似表現の「殺得血染波紅、屍如山疊。」を重ね、凄惨な場面を印象付けている。

その後で好漢の名前を一氣に列舉し、いまだ救出されない宋江らをめぐる緊迫した状態を示しながら、それを契機にまとまった豪傑たちの整然とした安定感を醸し出している。こ

うした表現を可能にするための導入として、宋江の「吟反詩」事件に端を發した一連の騒動における緊張の頂點である41回の回首に《念奴嬌》を配置して、歴史的な大戰を下敷きにした効果は非常に大きいといえよう。

このように、歴史上の人物にまつわる故事をちりばめながら、ときに豪快に、ときに格調高く、全體の流れを見据えて接合部を補強し、章回形式の枠組みの中で緊張と弛緩のリズムが組み合わせられている。

* 回を越えた豫告・主題の提示

古風一首：宋朝運祚將傾覆，四海英雄起寥廓。流光垂象在山東，天罡上應三十六。瑞氣盤纏繞鄆城，此鄉生降宋公明。神清貌古眞奇異，一舉能令天下驚。幼年涉獵諸經史，長爲吏役決刑名。仁義禮智信皆備，曾受九天玄女經。江湖結納諸豪傑，扶危濟困恩威行。他年自到梁山泊，綉旗搖雲水濱。替天行道呼保義，上應玉府天魁星。(21)

梁山泊に豪傑が集結する過程では、複雑な人間關係が交錯しており、次々に新登場する豪傑たちの銘々傳的な要素が強く、やがて中心人物となって梁山泊を率いる宋江さえ18回ま

では登場していない。こうした中で《水滸傳》全體の枠を讀者に意識させ、長篇ならではの大胆な展開を豫感させるためには、豫告や暗示を盛り込むことは大きな工夫だったといえるよう。

前半では、讀者に對して事前に話の流れを繰り返し示唆してまとめている。例えば21回は、宋江が初めて中心人物として扱われる「怒殺閻婆惜」の件であるが、「曾受九天玄女經」「他年自到梁山泊」「替天行道呼保義」「上應玉府天魁星」といった句によって、21回以後の回到繰り廣げられる出來事も詠み込んで、《水滸傳》全體の大きなストーリーを念頭に置きながら、好漢の勢揃いまでの過程における宋江に關連した節目にふれている。

同様に23回の回首では、その回の虎退治の話以外に、武松の將來として、29回で述べられる酒豪ぶりや、26回での兄の仇討ちといった主なエピソードを網羅し、32回までを一括りにするための目安となっている。

その他、51・78回の入回詩でも、宋江を中心に据えて對決すべき相手について詠み、また81回では豪傑全員の名前やあだ名も添えつつ、梁山泊の遠い將來も盛り込み、いずれも七言の22句・30句・20句という長さで、童貫・高俅の率いる官軍

との戦いや遼・方臘征伐など、後半の大規模な集團戦争を列舉している。そこで回の山場を豫告せずに、むしろ全體の流れに重點を置き、今後の道筋を示したのは、集團性が高まった後半部において、ストーリーの骨格を確認し、より圓滑に接續できるように意圖したものであろう。

* 百二十回本での入回詩の處理

最後に、「容興堂本」の入回詩が、百二十回本^⑤においてどのように處理されているかを比較してみよう。明の崇禎年間に編まれたとされる百二十回本は、百回の「容興堂本」と同じ繁本でありながら、全體として詩詞を削除する方向で整理し、回首に入回詩が一切置かれていない點が、百回本とは異なる^⑥。

一見すると、百二十回本では入回詩が一濟に消滅してしまっただかのように思われるが、實際には、同一もしくは類似した詩詞が回中に移され、用いられ續けている例が散見する。

「容興堂本」2回の入回詩では、前回の内容を確認した上で、新しい回の豫告をしている。1回の回末においては、洪太尉がどんな妖魔を逃がしてしまったのか、その正體を問いただすところで語り手の謎掛けが行なわれ、讀者の興味をつなぐ形で終わっている。次の回は、その疑問の提示を承けて「千

古幽局一旦開、天罡地煞出泉臺。自來無事多生事、本爲禳災却惹災。」と始まり、また「高俅奸佞雖堪恨」といって本文の敘述に先行して「高俅」の名前が初出しているのは、明らかに回の内容の豫告である。

それをふまえて百二十回本を見ると、同一の詩が、わずかに後にずらされ、本文での状況説明が終わってから歌い上げるようにして挿入されている。しかし、その時点で本文では説明されていない「高俅」の名が唐突に詩中で現れているために、前後関係がはっきりせず、讀者にとって謎のまま残されている。入回詩の位置なら回全體の内容の豫告と解釋することができが、部分的な場面のまとめとしては却ってパラノスが惡くなっている例といえよう。このように、前回の回末での疑問提示に呼應する形で、本文の敘述が一定の歸結を見せた後に詩を移している例は5回にも見られる。

また「容與堂本」の入回詩を、百二十回本の本文中で、内容的に最もずれの少ないところに挿入しようとした例もある。19回の入回詩は、もともと梁山泊の主であった王倫を林冲が殺し、晁蓋らが新たに仲間入りするいきさつを詠んでいる。18回の回末では、「智取生辰綱」に關連して「畢竟何觀察怎生差去石碣村緝捕、且聽下回分解」という問い掛けがなされてお

り、19回の冒頭から展開しているのは、一連の捕りもの騒ぎである。しかし、實際に入回詩の内容と結びついた事柄に話が及ぶのは19回の後半部なので、18回の回末と19回の入回詩とは直接はつながらない。あくまでも19回の山場にちなんだ概括であるので、詩の内容が本文の敘述よりもかなり先行する。そこで、百二十回本では、詠まれた内容の該當箇所詩を配置している。回首では漠然とした豫告であった詩も、本文で敘述が進行中の箇所に挿入されると、状況のまとめとしての役割を果たすことになる。

このように「容與堂本」の入回詩は、百二十回本では内容的に一致する本文中に移動させる方針で處理されているようであるが、入回詩の句數を減らしてから回中に移した例もある。44回で八句だった入回詩を、百二十回本では中の四句を削って長さを半分にして移動させている。全體の流れからすれば、44回で起こる出來事自體は楊雄と石秀の傍話であり、單獨では重要な轉機となりえない。したがって、回首で全體を豫告していたときの詩と、本文中で歌い上げるべき該當部分の事柄との落差を考慮して、このような措置をとったものと思われる。

しかし、こうした手直しも含め、百二十回本の本文中で「容

與堂本」の入回詩を再び活用しようとしている例は、後半に進むとほとんど見られなくなる。85回の入回詩は、遼との戦いにおいて宋江が時遷・石秀を敗殘兵にしたてて薊州城内に紛れ込ませる作戦を詠んでいるが、実際には84回の内容に相當し、85回との關連は薄い。そこで百二十回本では、詩の内容と歌い上げるべき箇所との對應をはかり、時機のはずれた強調部分を本來収まるべき本文中に挿入しようとしたものであろう。

こうして、「容与堂本」の入回詩が百二十回本でどのように處理されたかを見てみると、回首の詩詞と本文の敘述内容とのつながりについて、興味深い事實が浮かび上がってくる。もちろん、入回詩の内容や各回の山場の配置は《水滸傳》全體を通して均一というわけではないが、形式的には同様の體裁をとりながら、内容からすると、本文の讀み解きに必要な情報提供の役割を積極的に擔っている入回詩と、本文とは直接關係のない入回詩とに分かれている。

そうした入回詩に關して百二十回本では、一律に削除するのではなく、むしろ回によっては、なるべくそれを本文中に復活させようと腐心した痕跡も見えてとれる。しかし、入回詩に詠まれた内容を見ると、たとえ回中に移行させても、單に

《水滸傳》の入回詩について（北村）

回首から回中へと詩詞の挿入箇所を變えるだけでは收拾がつかないこともあり、例えば、漠然とした處世訓であるときには、本文で記述される出來事とは具體的に對應しにくいので安易に詩詞を回中へ移すことはできない。

また、物語全體を通觀した上での概括および主題の提示に行き着くような場合、部分的なまとめとするには、本文の敘述に先がけて、より多くの情報を盛り込んでゐるため、そのままの形では歌い上げるにしても、内容に落差がありすぎる。そのため、もとの詩詞を一部削除して規模を小さくした上で挿入する以外は、結局回中には移さずに終わっているのである。

入回詩をめぐる百二十回本の措置を見てみると、さまざまな配慮がなされていたことがわかる。このことから、「容與堂本」の入回詩の内容と役割りが、回に應じて多岐にわたっていたことが確認できよう。逆に言えば、入回詩に詠み込まれている事柄が本文の讀み解きと密接に關係している場合と、單純に話の枕として雰囲気づくりのために導入されている場合とでは、異なる處置が施されうることを示しているとも考えられる。入回詩の多様性は、章回形式の制約が、ストーリーの展開を重んじる立場からすると、いかに作爲的な意圖のもの

とで成り立っているかを示しているように思われる。

*むすび

《水滸傳》の入回詩は、一回分の出来事を象徴的に歌い込み、回中での呼應をはかり、語られる内容に即して讀者の期待を高めるはたらきをしている。

たしかに、これから展開する出来事の情報を回首の詩詞によって断片的に豫告することは、本文とは異なる作用をもっているといえる。すなわち讀者は、その暗示に基づいて、これまで知り得た情報を整理する餘裕が生じるわけである。

また、各回の終わりでは、話の盛り上がったところでひとまず敘述を中断して、次回にゆだねる仕掛けが施されており、その仕掛けによって暗示された問題は、そのまま次回へ持ち越され、讀者を引き付ける。

このように、さまざまな話柄をずらしてつなぐ形式では、新しい話の始まりは前の回の終わりですでに仕組まれているとも言え、一回ごとの區切りの間につなぎ目があるからこそ、そこを補うべく讀者の想像の飛躍が起こる。そして、その空白に入回詩があるために、圓滑かつ効果的な接合がなされているといえよう。

《水滸傳》は、全體を貫く大きな流れの他に、疊み掛けるようにして次々に發生する出来事の連續から成り立っている。話のまとまりは、一回で収まるようなものもあれば、數回分にわたる大がかりなものもある。つまり、一回の分量で終わる話のもとより、物語の流れが収束に向かっていないプロットでも、回末では毎回一律に強調表現によって盛り上がりを作り、讀者の期待と緊張を高めた上でいったん話を打ち切り、次回へ進むという形式をとっている。こうした中、數回分にわたる話柄の接合のために入回詩は大きな役割を果たしている。こうした入回詩が百二十回本で活用されている例は多くはないが、一部を加工してでも回中に挿入しようとした痕跡からは、清代の「金聖嘆本」で詩詞が一切削除されるまでの《水滸傳》受容史において、詩詞のありようの一面がうかがえるのではないだろうか。讀者の読み解きのための入回詩のはたらきの多様性そのものが、《水滸傳》の複雑な成り立ちを示す手掛かりの一つと考えられるであろう。

注

(1) 句讀は《容與堂本水滸傳》(上海古籍出版社、一九八八年)を参考にした。表中の「七×4」は七言四句を、「七×8」は七言

八句を示す。

(2) 各種百回本間の影響関係および文字・詩詞の削節については、齋藤護一「百回水滸傳考」『漢學會雜誌』六卷一號、一九三八年）をはじめとし、「容與堂本」の特質については、高島俊男「水滸傳「石渠閣補刊本」研究序説」『伊藤漱平教授退官記中國論集』所收、汲古書院、一九八六年）に詳しい。

(3) 入回詩に相當する詞も含めて、「容與堂本」中の詞の出現状況については、豊後宏記『『水滸傳』中の詞』『學林』第二十八・二十九號、一九九八年）にある。

(4) ただし、それぞれのはたらきが重複している場合もある。例えば12回のように「天罡地煞下凡塵」は天罡星・地煞星について述べて好漢の宿世を示している。そして「落草固縁屠國士、賣刀豈可殺平人」や「豹子頭逢青面獸」はいずれも12回の内容に相當するが、前者は回目「汴京城楊志賣刀」と同様に12回の山場についてふれており、後者は11回の回末の「畢竟來與林冲鬪的正是甚人、且聽下回分解」と呼應して、謎掛けの答えを出している。本文でこれから述べようとする内容を豫告しつつ、前回末の疑問の提示を直接承けて種明かしの役割も果たしているといえよう。

(5) 句讀については、『二百二十回的水滸』（商務印書館、1999年）を參考にした。また百二十回本は、田虎・王慶の亂を扱った20回分が「容與堂本」より多く、對照表では内容の重なるように、「容與堂本」の90から100回までが百二十回本の110から120回となつている。

《水滸傳》の入回詩について（北村）

(6) 百二十回本では回首に一切入回詩を置かないほか、回中の詩詞の現れ方についても百回本とは異なるところがある。兩者における詩詞の數量的な相違については、丸山浩明『『水滸傳』中の詩・詞について——百回本から百二十回本への過程——』『二松學舎大學人文論叢』三十四、一九八六年）で述べられている。

表 「容與堂本」における入回詩

| 回 | 入回詩 | 歴史故事 | 《水滸傳》 人物 | 梁山・ 水滸 | 星 | 豫 告 | ま と め | 種 明 か し | 主 題 提 示 | 脱 線 | 120 回本 での處理 |
|----|--------------|-------------|--------------|-----------|--------------|--------|-------------|------------------|------------------|--------|----------------|
| 1 | 詩曰:七×8 | | | | | ○ | | | | | |
| 2 | 〃 | | 高俅・洪信 | 天罡・地 煞 | | ○ | ○ | | | | 回中へ |
| 3 | 〃 | | | | | | | | | ○ | |
| 4 | 〃 | | | | | ○ | | ○ | | | |
| 5 | 〃 | | 花和尚・魯智 深 | | | | ○ | | | | 回中へ |
| 6 | 〃 | | | | | ○ | | | | | 〃 |
| 7 | 〃 | | | | | | | | | ○ | |
| 8 | 〃 | | 林冲:高俅 | | | ○ | | | | | |
| 9 | <鷓鴣天>: | | 智深・林冲・ 柴進 | | | ○ | ○ | | | | |
| 10 | 詩曰:七×8 | | | | | ○ | | | | | 回中へ |
| 11 | 詩曰 | | | | | ○ | | | | | 〃 |
| 12 | 詩曰:七×8 | | 豹子頭・青面 獸 | | 天罡・地 煞 | ○ | ○ | | | | |
| 13 | 〃 | | | | | | | | | | |
| 14 | 〃 | | 劉唐・雷横・ 晁蓋 | | | ○ | | | | | |
| 15 | 〃 | | 三阮 | 水滸・梁 山 | 七宿 | ○ | | | | | |
| 16 | <鷓鴣天>: | | 中書老相公 | 水滸 | 罡星・殺 曜・七星 | ○ | | | | | |
| 17 | 詩曰:七×8 | | 楊志・青面 獸 | | | ○ | ○ | | | | |
| 18 | 〃 | | 何清 | | 天罡地煞 | ○ | ○ | | | | |
| 19 | 〃 | | | 梁山 | | ○ | | | | | 回中へ |
| 20 | 〃 | | 王倫・林冲 | | 罡星煞曜 | ○ | ○ | | | | |
| 21 | 古風一首: 七×8 | | 宋公明 | 梁山泊 | 天罡・天 魁星 | | | | ○ | | |
| 22 | 詩曰:七×8 | | 閻婆 | | | ○ | | | | | |
| 23 | 〃 | | 武松・柴進 | | | ○ | ○ | | | | |
| 24 | 〃 | 姐己・西施 | 武松 | | | ○ | | | | | |
| 25 | 〃 | | | | | | | | | ○ | |
| 26 | 〃 | | | | | | | | | ○ | 削って回中へ |
| 27 | 〃 | | | | | | | | | ○ | |
| 28 | 〃 | 施小虎・武 都頭 | | | | ○ | | | | | |
| 29 | 〃 | 武松・施子 | | 水滸 | | ○ | | ○ | | | |
| 30 | 詩曰:五×8 | | | | | ○ | | | | ○ | |
| 31 | 詩曰: | | | | | | | | | ○ | |

| | | | | | | | | | | | | | |
|----|---------------|-------|----------------|-------|-----------|---|---|--|--|---|--|---|------------|
| 32 | 詩曰:七×8 | | | | 列宿 | ○ | | | | | | | |
| 33 | " | | | | | | | | | | | ○ | |
| 34 | " | | | | | | | | | | | ○ | |
| 35 | " | | | | | | | | | | | ○ | |
| 36 | 箴曰:六×10 | | | | | | | | | | | ○ | |
| 37 | 詩曰:七×8 | | 李俊・宋公明 | | | ○ | ○ | | | | | | |
| 38 | " | | | 梁山泊 | | | | | | ○ | | | |
| 39 | " | | | | | ○ | | | | | | | 40 回へ |
| 40 | " | | 吳用・公明 | | | ○ | | | | | | | |
| 41 | <念奴橋>: 周瑜 | | | | | ○ | | | | | | | |
| 42 | 詩曰:七×8 | | 宋江 | | | ○ | | | | | | | |
| 43 | " | | 黑旋風 | | | ○ | | | | | | | 38 回へ |
| 44 | " | 七國・五胡 | | 梁山 | | ○ | | | | | | | 削って 回中へ |
| 45 | 偈曰:五×8 | | | | | | | | | | | | 回中へ |
| 46 | 詩曰:七×8 | | | | | | | | | | | | |
| 47 | " | | 宋江 | | | | | | | | | | |
| 48 | " | | 宋江・王矮虎 ・扈三娘 | 梁山泊 | | ○ | | | | | | | |
| 49 | <西江月> | | | | | ○ | | | | | | | |
| 50 | 格言曰: | | | | | ○ | | | | | | | |
| 51 | 詩曰:七×22 | | 童貫・高俅呼 保義 | 梁山・水滸 | 煞罡・ 魁罡 | ○ | ○ | | | ○ | | | |
| 52 | 詩曰:七×8 | | | | | | | | | | | ○ | |
| 53 | " | | | | | | | | | | | ○ | |
| 54 | " | | 柴進・高廉 | | | ○ | | | | | | | |
| 55 | " | | | | | | | | | | | ○ | |
| 56 | " | | | | | ○ | | | | | | | |
| 57 | " | 諸葛・雲長 | 宋江・呼延 | | | ○ | | | | | | | |
| 58 | " | | 孔亮・呼延灼 | | | ○ | | | | | | | |
| 59 | " | | | 梁山 | | ○ | | | | | | | |
| 60 | " | | | 梁山 | | ○ | | | | | | | |
| 61 | <滿庭芳>: 諸葛 | | 吳用 | | | ○ | | | | | | | |
| 62 | 詩曰:七×8 | | | | 罡星 | ○ | | | | | | | |
| 63 | 詩曰:七×8 | | 俊義 | | | ○ | | | | | | | |
| 64 | 古風一首: 七×30 | 呂蒙・關羽 | | | | ○ | | | | | | | |
| 65 | 詩曰:七×8 | | | | | ○ | | | | | | | |
| 66 | " | | | | | ○ | | | | | | | |
| 67 | 詩曰:七×16 | 靈輒・荊軻 | | | | ○ | | | | | | | |
| 68 | 詩曰:七×8 | | 宋江・晁蓋 | | | ○ | | | | | | | |
| 69 | " | | 俊義・宋公明 | | | ○ | | | | | | | |
| 70 | " | | | | 煞曜罡星 | | | | | ○ | | | |

| | | | | | | | | | |
|-----|---------------|-------|-------|-------|-------|---|---|---|-------|
| 71 | 〃 | | | 水泊・梁山 | 天罡地煞 | | | ○ | |
| 72 | 〃 | | | | | ○ | | | |
| 73 | 〃 | | 李逵 | 梁山 | | ○ | | | |
| 74 | 古風一首： 七×16 | | 燕青 | 梁山 | 罡星 | ○ | | | |
| 75 | 詩曰：七×8 | | | | | ○ | | | |
| 76 | 〃 | | | | | ○ | | | |
| 77 | 〃 | | | | | ○ | | | |
| 78 | 賦曰： | | 混江龍… | 梁山 | | | | ○ | |
| 79 | <西江月>： | | | | | ○ | | | |
| 80 | 詩曰：七×8 | | 高俅 | 梁山 | | ○ | ○ | | |
| 81 | 詩曰：七×20 | | | 梁山泊 | 罡星煞曜 | | | ○ | |
| 82 | 詩曰：七×8 | | 燕青 | | | | ○ | | |
| 83 | 古風一首： 七×32 | | 宋江・學究 | | | | ○ | | |
| 84 | 詩曰：七×8 | | | | | ○ | | | |
| 85 | <西江月>： | | 時遷・石秀 | | 天星 | | ○ | | 84 回へ |
| 86 | 詩曰：七×8 | | | | | ○ | | | |
| 87 | 古風：七×20 | | 兀顏將軍 | 梁山泊 | | ○ | | | |
| 88 | 詩曰：七×20 | | | | | ○ | | | |
| 89 | 詩曰：五×8 | | | | 曜宿・明星 | ○ | ○ | | |
| 90 | 詩曰：七×8 | 韓文・東坡 | | | | | | ○ | |
| 91 | 〃 | | | | | | | ○ | |
| 92 | 〃 | | | | 罡星・殺曜 | | | ○ | |
| 93 | | | | | | | | ○ | |
| 94 | 〃 | | | 水滸 | 天罡 | ○ | | | |
| 95 | 〃 | | 宋江・吳用 | | | ○ | | | |
| 96 | 〃 | | 宋江 | | | ○ | | | |
| 97 | 〃 | | 吳用・花榮 | | | ○ | | | |
| 98 | 〃 | | 公明 | | | ○ | | | |
| 99 | 〃 | | | | | ○ | | | |
| 100 | <滿庭芳>： | | | | 罡星 | | ○ | | |